

庭木に利用する樹種の特徴と管理

～ウメ～

日本樹木医会富山県支部
樹木医 西村 正史

ウメとサクラ、日本人にとっては最も馴染みの深い樹木であると思います。サクラについては紹介しましたので、今回はウメについて紹介します。

1 特徴

ウメはバラ科サクラ属の落葉高木で、中国が原産地です。日本には奈良時代の遣隋使または遣唐使が、中国から持ち帰ったといわれています。花を觀賞し、実も収穫できる優れたもので、栽培もそれほど難しくないので、全国至るところで栽培されており、庭木としても植栽されています。

花は、葉の展開に先駆けて1～3月に咲きます。その後、枝が伸びるとともに葉も開いていきます。花が散ると、受粉していれば実がだんだんと大きくなり、6～7月頃には収穫できます。翌年の花となる花芽は、7～8月頃になると短枝に形成され、長枝にはほとんどつきません。自家受粉では結実しにくいのですが、結実する品種もあります。

花を觀賞するほか、果実を梅干しや梅酒、梅酢、ジャムなどにして食用とします。

300種以上の品種があり、野梅（やばい）系、豊後（ぶんご）系、緋梅（ひばい）系の3系統に分類されています。梅の実を採るのは主に豊後系です。

なお、富山県中央植物園のサクラ・ウメ園内には、68品種153本のウメの木があります。1月～3月まで鑑賞できます。写真1,2はその一例です。

2 維持管理

日当たりが良く、通気性と水はけの良い、肥沃な土壌を好みます。日陰で湿気が多い場所では、徒長枝が多くなり、花芽もつきにくくなるので避けられます。

剪定は落葉後から初冬に行います。長枝では、この時期に基部を3分の1から半分を残しておく、翌年には残した基部から新しい短枝が発生し、葉腋に花芽をつけます。花が咲き終わった段階で葉芽が展開する前でも可能です。それ以降の剪定は葉量の減少となり、ウメが葉量を増やそうとするので、花芽の形成に影響します。

夏季剪定は、花芽ができる短い枝に十分な光と

通風を与えるために、長枝を切り詰めたり、不要な枝を間引いたりする程度とします。

アブラムシ類やアメリカシロヒトリがよく発生します。前者では浸透移行性殺虫剤（マツグリーン液剤2、ダイリーグ粒剤、イマージ液剤等）で、後者ではトアロー水和剤CT等のBT水和剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤等で対応してください。

なお、2009年に東京都青梅市のウメがウメ輪紋ウイルス（プラムボックスウイルス）という植物ウイルスに感染していることが判明し、神奈川県、岐阜県、愛知県、大阪府、兵庫県でも発生が確認されています。人体に害はありませんが、葉や果実に斑紋などの症状が出て商品価値が無くなってしまうため、恐れられています。本県での発生は確認されていません。



写真1 ウメの園芸品種
左：カゴシマベニ（鹿児島紅）2014.3.24撮影
右：クロダ（黒田）2013.3.26撮影



写真2 ウメの園芸品種
左：ツキカゲ（月影）2014.3.11撮影
右：ハクボタン（白牡丹）2011.3.13撮影